

第9回高等学校改革プラン推進委員会（第三推進委員会）議事録

- 1 日時 平成17年10月11日（火）午前9時00分～午後0時00分
- 2 場所 伊那市生涯学習センター〔いなっせ〕 501 研修室
- 3 出席委員

池上 昭雄委員長	北原 曜委員
笠原 伸二副委員長	熊谷 秀男委員
小坂 樫男委員	関 哲夫委員
岡庭 一雄委員	北原 秀樹委員
小林 辰興委員	藤本 功委員
小口 武男委員	

4 開会

（池上委員長）

これより第9回目の推進委員会を開催いたします。
まず、事務局から資料説明をお願いします。

5 資料説明

高校教育課野村主幹教育支援主事から説明 【説明内容省略】

（池上委員長）

ありがとうございました。
それでは今のご説明について、ご質問、ご意見がございましたらどうぞ。

（小林委員）

3つお願いしたいのですが。これはすべて資料1の事についてですが。1つはちょっとよく聞こえなかったの、もう一遍お願いしたいのです。

入学時の段階で全体の中での、不登校生または不登校傾向だった子の割合が、どのくらいだったかということが1つ。それから2つ目は、この授業の受け方を見ますと、特に2のところですが、これは自分の所属するところから20単位、他から10単位取れるということですね。実際に生徒は、例えば私たちからのイメージからすれば、午前の部を1周すれば午後はまったくフリーで、何をしているかわからないというふうなイメージが、あったわけです。

ここの生徒は実際、午前の部を選択した場合午前は授業を受けて、午後は若干は授業を受けるけれども、それ以外は何をしているのか。または大部分が、実際には受けたりしていれば、全日制の生活スタイルですよ。我々のイメージは、午前の人たちは終わればお昼に帰ってしまうと、午後の人たちは午後だけから来るというイメージで、多部制については捉えていたわけですが、ここの生徒の状況はおおよそはどんなふうなのか、ということが2つ目です。

3つ目は、7番に進路状況が出ていますが、16年度のこの学校ができたのは平成5年だ

ったと思いますけれども、この進路の状況がどの程度、何年から何年の比較というのがちょっとわからないと思いますので、おおよそでよいので進路状況が、どのように変わってきたのか、またはほぼ変わっていないのかどうか、その3点をお願いします。以上です。

(野村主幹教育支援主事)

お願いいたします。すみません。発音が悪くて聞きと取りにくかったかと思います。

最初の質問でございますが、不登校経験の生徒、入学時不登校経験の割合ということでございますが、細かい数字はございませんが、おおよそ半数とおっしゃってありました。こういう表現でしたけれども、「中学校時代に長期欠席者であった者は半数」という言い方でありました。先ほど長期欠席者もそうでない者も、実際の高校のところでは欠席の傾向については、変わりがないといえますか違いがないというようなことを申されておりました。1番については以上でございます。

2番目のご質問でございますが、例えば午前部に所属をしていて、あと午後はどうなっているのかということでございますけれども、しっかりした質問で、そういう表現で聞いてきたわけではありませんが、類推するところによれば午前部だけに所属をしていれば、当然午前の授業が終われば帰る者がございます。また3修制と申しますか、3年間で卒業をしようとする、自分のところの午前部の時間数20単位になりますので、これを3年間ですと60単位にしかありません。74単位になりますので午後部を受けて3年で卒業をします。つまり午後部を受けて、74単位以上にしないと卒業できませんので、当然午後部を受けていく者もいるということでございます。従いまして午後部も受けていると授業につきましては、全日制と似た感じになるのかなというふうに思っております。

7番目の進路状況でございますが、すみませんホームページ等で載っていたものを、そのままということでございますので、ちょっとその比較はしてございませんので、聞いてございませんので、また調べられたら調べてきてご報告したいと思います。以上でございます。

(池上委員長)

よろしゅうございますか。

ほかにございますか。

(北原曜委員)

同じ資料1の件なのですが、5番目の入試の状況ですね、2期生で春季と秋季で2回生徒募集を、しているということですが、これはひとつは多部制・単位制としてはいい方向かなと思うのですが、ただ春季の場合と秋季の場合と2回募集するということは、秋季つまり後期に、もう1回前期と同じような授業を繰り返して、この後期募集の人たちには、開かなければいけないということなのではないでしょうか。

（野村主幹教育支援主事）

これについても、委員お尋ねのような形で、ご質問をしたわけではございませんが、前期入学制 9 割でございます。9 割の生徒があり後期が 1 割ということでございますけれども、開設されている科目の中で、単位制でございますので、必要な科目を取りということでございますので、必ずしも前期の科目と、まったく同じ科目が開設されているとは、言いきれませんし、また同じ講座でも、職員がいますので、もう一度開設されているということも、あり得ると考えてはおります。

（池上委員長）

はい。ありがとうございました。
よろしゅうございますか。

（野村主幹教育支援主事）

すみません。

2 期制についてで、ございますが、2 学期制といいましてもこの学校の場合には、科目ごとに単位認定を、しているということでございます。2 期制をとっておりましても、1 年間で単位を認定という学校もあるかと思いますので。この学校の場合は学期ごとに単位を認定しているということでございます。

（熊谷委員）

すみません。3 年で卒業可能ということですが、3 年で卒業している割合はどのくらいあるものかということと、卒業率の向上が課題だという話を聞いたような気がするのですが、これで見ますと 260 も入っていて、就職状況を見てみますと 179 となっているのですけれども、その辺の状態といいますか傾向というのはどうなっていますかお聞きしたい。

（野村主幹教育支援主事）

はい。最初の質問についてですが、そこまで聞いてございませんで、調べてみないとわからない、正確な数字は申し上げられないかなと思います。

2 番目の卒業率の関係でございますけれども、課題だとおっしゃっていましたが、確か去年は 68% とお聞きしております。

これは松本筑摩高校においても、65 から 70% とお聞きしていますので、大体その程度のものかなというふうにお聞きしてまいりました。ただ向上させなければいけないという意味で、中央高校のほうをとらえているということでご紹介したわけです。

（池上委員長）

よろしゅうございますか。
ほかにございますか。

(小林委員)

今の熊谷さんのこと、少し付け加えたいのですが、今言った3年で卒業するというのが68%という話でしたね。そうしますと....。

(野村主幹教育支援主事)

違いました。すみません。よく読まなくて申し訳ございません。68%というのは卒業率という表現をされましたので、1年入学した生徒が3年もしくは4年以上かけて卒業したやつが68%というふうに私は理解しました。

(小林委員)

そうすると3年で卒業する割合は現在のところはちょっとわからないということですか。

(野村主幹教育支援主事)

よろしいですか。すみません、ここの表にございませんので、表現できませんが、大体多部制・単位制の学校の在籍の状況、ここに表がないので申し訳ございませんけれども、1年次生と申しますか2年次生、3年次生、4年次生と数字を見て行きますと、だいたい4年次生が、極端に少なくなっています。そういったときに、これでやはり3年で卒業した生徒が、多いのかなと考えるわけでございますけれども、数字を追ってお示しをしておりますので、それ以上説明できません。

(小林委員)

すみません。ちょっとこのことにこだわって申し訳ないですが、3年で卒業ができるというメリットといえばメリットなのですが、そうすると全日制の学校に行くことと違う何が多部制・単位制のメリットがあるのかというあたりが、ここでもしおわかりだったら教えて下さい。全日制で3年間卒業する場合とこの多部制・単位制の学校で3年で卒業するという、いったいそうすると多部制・単位制を選択するメリットって何なのかと、全日制と変わらないのではないかと心配があるわけです。

それを、お聞きしたいということと、もうひとつ志学館のことで設置系列のことですが、4ページの設置系列のことですが、コース制とは異なると言っているわけですが、そうしますと例えば人文社会という系列を選択したとしても、ほかの系列の科目も履修できるということですね。

そうしたときにその系列の選択した生徒が、だいぶ部分はその系列であって後は部分的に、どうしてもこのところを受けたいという形なのか、まったく人文社会の子が半分ばかりほかのところを受けるとか、ばらばらになっているのか、そのところをもうちょっと教えてもらいたいんです。

(野村主幹教育支援主事)

はい。2つご質問をいただきました。最初の全日制と変わらないのではという多部制・単位制の関係の話でございますが、全日制の場合にはご承知のように、学年制をしいているのが基本でございますので、みんなで同じ科目を一斉にというのは、遠い感じがござい

ます。ただ多部制・単位制につきましては、自分で時間割を組み立てていくところがございますので、そこが大きな違いかなというふうに考えてございます。

また必ずしも不登校生のための学校とは、とらえておりませんが、不登校気味であった生徒、あるいは学校環境、以前の学校になじめなかった生徒が、自分で授業を組み立てる等のことにより、新たな環境でやっていけるとそういうお話もお聞きしているところでございます。総合学科につきましては、篠原から申し上げます。

（篠原教育幹）

お願いいたします。

本日の資料長野県塩尻志学館高校の総合学科についての4ページこれを、ご覧いただきたいと思います。4ページの5、設置系列がここに一覧表になってあります。系列はまずご理解いただきたいものです。学科ではないということではないということであります。仮にこれがもし学科ですと、それぞれの学科の中に、その学科としての科目が設置されております。従いましてその学科に属します生徒は、その学科で設置されている科目を全員で取っていくと、こういうことになります。

この総合学科における系列というのは、いろんな表現ができるわけですが、1つの表現として、言ってみれば総合学科の看板であるということが、まずいえると思います。看板というのは何かといいますと、本校では、例えば人文社会、自然科学以下ありますが、人文社会に目標があります。人文社会の系列の目標、この目標に沿った勉強ができますと、こういうものであります。

例えば自然科学、目標があります。この目標に沿った勉強が自然科学分野でできると、そういうものになっております。さらにそれぞれの系列、情報ビジネスまでありますけれども、それぞれの各系列を深く学ぶことができる。つまりそれぞれの系列については、その系列の基礎的な科目から専門的な科目まで、配置してあるということであります。

従いまして、例えばさいさん話に出るわけですが、下から3つ目に食品化学、これが実はワインの勉強、これを中心にする、そういうものであります。このワインの勉強、基礎的な部分から、かなり専門的な科目まで配置されております。

この基礎的な科目については、実はこの食品科学で、この系列の科目を中心に取っながら勉強しようという生徒ばかりではなく、他の例えば人文社会ここをしっかりと勉強して、将来的には文系の大学に進もうとか、そういうふうな生徒も、基礎的な部分ではワインの基礎、面白そうだとこれをきちんとやってみようかと、そういうふうな生徒たちもいるということであります。

つまり科目、人文社会なら人文社会あるいは食品化学なら食品化学、それに関連した科目これを置いている。その科目の群れ、これを称して人文社会系列というふうに読んでいくということであります。ですから学科とは、基本的に異なるということとはご理解いただければと思います。

（池上委員長）

ありがとうございました。よろしゅうございますか。

(熊谷委員)

すみません。多部制・単位制の考え方は「このようなものです」と1つの例としてわかる訳ですが、これが現在全日制と並立されている定時制高校に、比べて優位性があるのか、どうかということが、私はよくわかりませんよ。

ですから県教委としては、現行の長野県で行われている、筑摩高校にいるのか、どうかわかりませんが、全日制と定時制と並立でやられている高校を、多部制・単位制にこだわることを静岡県立中央高校という事例があるわけですから、これと比較して優位性が、どこにあるのかというのについて、比較論的な資料を次回で結構でございますので、ぜひ「こういうふうになるから多部制・単位制に、移行していくのはいいことなのだ」というものを、事例として松本筑摩がいいのかわかりませんが、筑摩の現状と比較して、こうなるからこう結果がでるといふものを、ぜひ出してもらいたいなと気がします。

この多部制・単位制高校の検討委員会、平成15年ですか、すでに2年前のもんですが、これについても長野県にふさわしい多部制・単位制の在り方というふうな言い方をしながら、委員を見れば半分くらいは長野県外の人と。例えば学校の校長、高等学校の校長先生が出ているんですが、なぜか東京の高等学校の校長先生が入るんですね。なんでこういう構成で、長野県にふさわしい高校教育が語れるか、長野県民としては不思議ではないのですが、これは感想です。結構です。

(池上委員長)

ありがとうございました。事務局回答をお願いします。

(篠原教育幹)

お願いいたします。

現在松本筑摩高校、いわゆる昼間部、夜間部そして全日制とあるわけですね。それといわゆる3部制の多部制・単位制高校、このメリットを比較することは非常に難しいと思っております。やはり3部制の多部制・単位制高校をつくるという意図、これは多様な生活歴を持った生徒たち、これに適合したものを準備するということに主眼がございます。

一点言えるとするれば、やはり松本筑摩高校で全日が、さらに昼間部、夜間部に全日が、加わっているというこの辺りは、いわゆる学校運営上の、さまざまな難しさというものが、あろうかというふうに思っております。

つまり施設の利用であるとか、あるいは時間割の編成であるとか、そういった日課時間ですね、こういったものの設定や、そういったものについては、若干煩瑣(はんさ)にならざるを得ないだろうなと思います。

多部制・単位制ということの学校をつくるということで、ひとつの特色をきちんと出してその中で、やはり生徒諸君にPRする、そして生徒を集めていくということ、これが今回の多部制・単位制を各地区に1校つくるという意味合いだと、ご理解いただければと思います。

ちょっと資料は難しいかなというのが、今のところの私どもの感想でございます。

(熊谷委員)

今もおっしゃっていましたが、「松本筑摩高校ではこういう課題があると、それが静岡県立静岡中央高校のようにすれば、こういうふうに解決される」ということは、当然考えるから県教委としては、多部制・単位制を従来型の高校設置に変えて、単独多部制・単位制高校を、4 つもつくっていきたいと出しているのですから、当然資料として県教委はそういうふうに考えますので、だいぶん出ているのですが、しかるべきなのだと私は思うのは自然に考えれば。効果は見えないけど何しろやろうとこれも乱暴な話ではないかと思うのですがいかがでしょう。

(篠原教育幹)

多部制・単位制そのものを、効果、メリットというものは、今日のところでもこれまでもお話してきているとおりなのですが、そういうことでありましたら全日制が加わってというと全日制がない完全な多部制・単位制の高校と、この辺のできるだけメリットがわかるようなそんな形で、調査をしてみたいとそんなふうに思っております。

(熊谷委員)

特に3年で先ほども言いましたが、3年で卒業する多部制の生徒がいるということ、全日制と基本的には同じことなのではないかという感覚がするので、その辺が本当にどうなのかということ、踏み込んだ検討をしてほしいと思います。

(篠原教育幹)

わかりました。ただ1点だけ全日制との違いというのを、先ほどの単位制というのが1点ありましたが、午後部の生徒にとっては、かなり今までとは、違ったメリットというものは出てくるだろうと、先ほど申しましたように、いろんな生活歴、日常の生活の仕方というものが、今の生徒たちにあります。

完全に全日とまったく同じということではなく、例えば午前部の生徒でも、午前部をやり、そして午後の空いた時間でさまざまなことをするという生徒もいるでしょうし、午前部をやり、午後の時間さらに単位を取りながら、3年で卒業をするとそういう幅が、やはり多部制・単位制の中にはある。午後部になれば余計そのようなことが、出てくるとそんなふうに思っております。

(池上委員長)

ありがとうございました。よろしゅうございますか。

(熊谷委員)

今いったようなことをきちんと文章で出すのですか。

(池上委員長)

文章でお出しいただけるかということですか。

(篠原教育幹)

資料としてお出ししたいとそんなふうに思っております。

(池上委員長)

次回ということですか。

(篠原教育幹)

はい。次回です。

(岡庭委員)

財政の問題で試算出されたので、前から言っていまして県議会とはいえ出していただいたということは、参考になると思っております。この問題でひとつ、ふたつお願いをしたいのですが、知事が答弁の中で答えているように、今回の高校再編の問題は、ある程度の学級数、学校規模がないと、教員配置の問題等、しっかりした教育ができないのだと言っているわけですし、お金の問題については県民が、これだけ掛けてもいいのではないかとということになれば、それはそれとして考えてもいいのではないかと回答もしていますので。

ひとつは財政問題。確かにこういう形で減ってきますが、例えば藤本さんの総合学科のアンケート結果でも、総合学科をつくるということによって、教員の充実をしていかなければいけない。教育課程あるいは教育施設の充実もしなければいけないということもあるわけですが、そのことは前から議論になっている、塩尻志学館高校が成功したひとつの例というのは、県教委がそういう点で全精力を挙げて、ひとつの学校をつくった、モデルをつくったというということがあると思うので、たぶん総合学科高校をこれからつくっていくと、かなり経費が、普通の学校より余計に高いのではないかと考えております。

もうひとつ多部制・単位制高校の問題ですが、今静岡の話をお聞きすると、3部できちんと教員を配置していく、ということになってくると、教員の数も今の定時制高校の標準の数とは、まったく比べものにならないくらいの高数を、入れていかなければならないだろう、というふうに思っております。

そういうことに対して増減ですね。プラス・マイナスの計算は、どうなっているのかということがひとつあります。

それからもうひとつは、今回の県の再編計画の中には3学級の学校も残ってくるわけですし、平均が6学級から7学級になってきますと、そこは教員が充足してくると。しかし3学級のところは残ってくるわけですが、そういうところの教員配置という問題を、ここまで教員配置をしっかりしていって、子どもたちの教育をしっかりしていくという、県教委の方針がしっかりしているならば、3学級の学校に対しても、今やられているように、県民とか講師とか立地とかではなしに、もう少し教員の濃厚な配置方法というものを、考えていかなければならない。

あるいは学校も、ってみればひとりの教諭が、ふたつの学校をしっかりとって、週1なら週1だけは専門にやる、ということになっていかざるを得ないのではないかと、それは事務局がやっているように、教育論をもっと語ってというところを、私は大事にしたいと

思っています。それは別の話として。

こういうことから考えてみて、23 億ということが、どういう処理条項をもっていくのかという点、県教委としての今私がいった試算が、おありになるのかどうか、あったらその辺のプラス・マイナスを含めてお話を、していただければ大変参考になると思っております。

（池上委員長）

お願いいたします。

（吉江高校教育課長）

今、岡庭委員さんからいただきましたように、基本的にどう動くというものをベースで考えていないわけではもちろんございません。ただこれは先ほどお話がございましたように、3 学級規模の学校が今後残すとして、基本的に今の 3 学級をベースに考えております。

それについては、まずは先生の数というのは基本的に考えておりますが、その学校が今後どのような、付加的要素が入るかによって若干変わってくると思います。

総合学科とか多部制・単位制につきましては、現時点においては私どもが考えているのと、この辺りが実は個々の学校ごとに、出しづらい大きな点なんでございます。

今現在、例えば塩尻志学館高校は先ほど見ていただきましたように、幾つかの系列がございしますが、この系列が幾つになるのかによりまして、単純な運営費、資料でいきますと、学校運営費の削減という数字で出てまいりますが、学校運営費自体が、一般の社会人講師をお願いしたりした場合、この数字の増減にかかわってくるのですが、増部分が十分に見えてまいりません。

この辺は具体的な学校と、具体的な学校に幾つの系列を入れるかによって変わってまいりますので、あるいは多部制・単位制高校も、例えばの話が 3 部制にしまして、3 部のうちの午前、午後、夜間を午前部を 1 クラスにするとか午前部を、2 クラスにするかによっても変わってまいります。

ですから一般的イメージでシミュレーションをしておりますので、それで積算しました場合には、みていただきました資料 2 のような形になる。ただそれが今後、各それぞれの第 3 通学区に限らずほかの推進委員会を含めまして、状況が変わってきますとそれによって増減が変わります。それによって最終的にある程度の形がもっと具体的になった段階でないと、今お話いただきましたような個々の数字でいうのは、なかなか責任をもって出しづらいということが、現状だということをご理解をいただきたいと思います。

（岡庭委員）

たぶん私は 23 億の削減というのは、もっと圧縮せざるを得ないのではないかと考えています。高校教育の充実ということを考えていくと。そういう点でこの 23 億が独り歩きをしてしまうと、まったく困るということです。

もうひとつは事務局が前に言っていました地方交付税の算定額で、長野県の場合の高校教育費がどのくらい算定されて、それと実質支出がどういう関係になっているのか、お教えいただきたいと思います。

(吉江高校教育課長)

交付税の関係で申し上げますと、これは市町村長さんの場合には、よくご存知のように基準財政収入額にそれぞれ若干算定されていますが、それから基準財政収入額を差し引きまして、その差し引いた結果が交付税という形になります。

ご案内のように、平成 16 年度におきましては、国の三位一体の改革からみて、長野県の場合におきますと従来と比べますと 300 億からの減になっているという状況から申し上げますと、なかなかその数字を、イコールということにはなるものではございませんので、その辺はご理解いただきたいと思います。

(岡庭委員)

大まかに言えば、基準財政収入額と実質支出額との差というのはだいたいどのくらいになるのでしょうか。

(吉江高校教育課長)

そういうような対比というものは、従来からやっておりませんから、私どもも含めてご提案していないのが実情でございます。

(熊谷委員)

すみません。14 校減って多部制 4 校も増えて 23 億の財政効果の試算が出たのですが、一番最初にいただきました資料の中に、1 学級 4 学年の高校の運用経費が 3 億 7,500 万と教室 35 人と出ているのですが、これで単純に計算をしますと、54 億なのです。4 学級、学校が 14 校減った。教員も 490 人減るのですが当然多部制・単位制、総合学科なり、そちらに運営を移行するということで 30 億は消える、教員も 330 人ほどそちらに移行する試算をしているのかと思うのです。

どういう部分で 30 億が充実に回るのか、当然試算があるはずなので教員の 330 人くらい 325 人ですか。それについての、私は 1 学年 4 学級が 14 校消えると試算しているだけなのですが、次回で結構ですので、こうすることで実はこういう部分を充実させる部分だ、ということが当然あると思いますので、ただ 23 億円削減だけでは 14 校減って 23 億円だけでは、単純に計算をすると 1 億 1 校ぐらいしかならないので、当然充実させるということが、単純に計算をすると 30 億円近くあるんで、そういうことに経費を掛けていると思いますので、その辺に対して資料を出してほしいと思います。

(吉江高校教育課長)

「14 校」というお話でございますが、実は多部制・単位制はむしろ削減というか、結果的に学校の数からすれば減ずる形にはならないかと思えます。ご覧いただきましたように、先ほど若干岡庭委員さんのほうにお答えいたしましたように、クラス数も例えば午前部を 2 クラスとしますと、全部で 1 学年が 4 クラスできます。4 クラスの 4 倍としますと、16 クラスということで、それなりの規模の学校になりますから、その学校自体にかかる経費というのはそこそこの数字になりますので、イコール減になりません。

ですから単純に見るとほぼ 10 校減というイメージになるかと思います。それと同時に

さらに学校が、それぞれの個々の規模が今回の私どもの候補案自体も違ってきていますので、実のところご要請はいただきましたが、個々の学校の減を語る場合には、当然増分を語らなければいけません。今ある生徒数がどういうふうに分けるかということについて、十分な私どものほうのイメージが、イコールそのまま動くのかということに疑義がある。当然ながら資料をお出しすれば、それについて疑問点も出てまいりまして、それがいいのかどうかという議論が、当然出てまいりますので、なかなか今お話をちょうだいしたようなもので数字というものは、出しづらいということでご理解をいただきたいと思います。

（熊谷委員）

ですから多部制・単位制にお金がかかりますよということはわかります。総合学科を新しくつくるのでそこにお金をつぎ込まなければいけないというのもわかる。それを具体的に、実際に県教委としては、善し悪しは別にして学校名まで言っているわけですから、「これだけの高校を、減らして総額として幾ら浮くと、これをこちらにまわすから、23 億円なのだ」と試算をしているはずなので、23 億円を出した以上は、この 23 億円に至った経過を説明する責任は県教委にあるのではないかと思います、いかがでしょうか。

（吉江高校教育課長）

ご覧いただきまして、また答弁の中でもお答えしておりますが、「総合学科等にかかわる運営費は増分は見えておりません」という答弁を申し上げております。今ご覧いただきますと例えば学校の運営費は、削減でこの数字は削減されるでしょうと申しておりますが、先ほども申し上げましたように、8 系列の系列ができるのか 6 系列になるのか、はたまた 10 系列になるのかによりまして、総合学科というのは基本的に、社会人講師が何人いるかという議論が出ますので変わってまいります。

その辺がはっきり見えない段階で、プラス要素というのは出しづらいということの中で、この数字だけをプラス増分は出してない、プラス増分はなかなか算定しづらいのでそれについては含めておりません、ということでこの 23 億というのをお出しした経過でございます。

（池上委員長）

よろしゅうございますか。

この議論は今、事務局からも話がございましたが全体のその他の通学区の議論の進捗によって、数字がだんだん収められるでしょうから、もう少し時間をとっていただいて、そのときまた資料の説明、または提示をいただければ、むしろそのほうがいいのではないかと思います、いかがでしょうか。

そんなことで資料は、定数がもう少し精度を上げていきたいと思いますという立場でよろしいでしょうか。

(小口委員)

先ほどの、志学館高校の総合学科についての、資料を見せていただいて、総合学科はなかなか自由度が高くてうらやましいと思う反面この4ページあたりの教育活動の特色や、いろいろ見ておりますと、これからの普通学科についても、こういう総合学科的要素を、取り入れていかないと、多面的なこれからの将来にあった教育になっていかないのではないかとそんな気が私はしております。

経営者協会で海外の学校の教科書をいろいろ比べてみると、子どもが勉強を好きになるか嫌いになるかというのは、やはり日本の教育はどちらかというと、社会性から少し離れているとこういうふうなふうに思いまして、いかに普通高校といえども、社会性にあった教育をしていかなければいけない、こんなふうな思うわけです。

4ページの教育活動の特色を見ると、これらに書いてある内容というのは総合学科でなくて普通高校でもこれはできる、結構できるような要素が多いように私は思いまして、むしろできない要素というのが、規模によるような気がしているのです。

高校というのはある程度規模がないと、このような多面的な教育ができないと、私はそういうふうに思いますが、その辺はいかがでしょうか。

(篠原教育幹)

おっしゃるとおりだと思います。

普通科がいわゆる我々が高校時代の普通科というままでは現在もちろんありません。ありませんが普通科の中で、特にキャリア教育という観点から言えば、工夫する余地はあると思います。ただしやはり総合学科、単位制の総合学科のほうが自由度がきくということ は確実です。従いまして総合学科の特色というものがかなり生徒たちにいわゆる実現されやすいということだろうと思います。

確かにおっしゃるとおりで、4ページの4番、教育活動の特徴ですが、この中にある「すべて柔軟さ」という形容詞を使っているわけなのですが、この柔軟さというものが総合学科独自のものだろうと、ただしこの中にあるひとつひとつのもの、これは現在普通科においても、あるいは商業科、工業科の中においても取り組みの時間のその大きさ、あるいは取り組みの回数の多さ、あるいは意識づけ、この辺は若干、それぞれ違いますが、どの学校でも取り組まなければならない、そういう内容であるということとは言えると思います。

(小口委員)

例えば規模と比べた場合に、「ある程度の規模があるから、これだけ柔軟な教育ができる」というものと、「規模が少ないからできない」というのは、やっぱり完全にそのような傾向がありますか。

(篠原教育幹)

一面では規模もあると思います。規模というのは教員の数ということに直結しますので、当然のことながらあります。それから施設・設備。これもやはり規模の中に入りますので、施設・設備があれば、そういうものを使いながら、資料にあるような教育目標を達成しやすいということはあると思います。

ただ、やはりもう少し大きなことは制度的な面。総合学科という、学科の持つ非常に大きな特性。これだろうなという気がいたしております。

（藤本委員）

一点だけ、伺いたいのですが多部制単位制については私も認める点はいくつかあります。一点は、やはり全日制、特に定時制の入試での「適格主義」と、全日制の学校制度になじめなかった、あまりいい言葉ではありませんが、弾き出されてしまった生徒の受け皿という意味で、多部制・単位制高校を認めるわけですが、先ほどの卒業率 68%というのは、途中で入ってくる生徒もいるわけですね。この 68%という卒業割合は途中で入ってきた人はどうなんでしょうか。

（野村主幹教育支援主事）

そこまで細かに聞いてお尋ねしたわけではございませんが、入学ですので、途中で入ってきた生徒も含めてというふうに考えてよろしいと思います。

（池上委員長）

よろしゅうございますか。ほかにございますか。

それでは、実は私も先日、静岡の中央高に行ってみりましたので、その感想を申し上げたいと思います。

まず、規模的に見て 700 名以上というスケールで、これは現在ある、いわゆる定時制の数に対して、かなり規模が大きくなりました。逆さに言いますと、多様な選択肢が求められるということに相成ったと思います。

それから、今ご質問がございました、いわゆる退学の問題でございますが、これはご説明の教頭先生も随分苦悩されたお顔をされながらのご説明でございましたが、これが問題なんだろうなというふうに思っておりました。

それから、静岡県下では、中央にあります静岡でこの学校が運営されているわけですが、生徒の通学範囲は資料によりますと浜松から大体三島。概念としてはちょっと小さいですが、要するに、静岡をほとんどネットするというふうにお考えいただいて、長野県で申し上げれば、下伊那から大体佐久平、このくらいのあたりまでは直線距離で行ける距離ではないかと。交通事情その他ございますので、一概に比較できませんけど、そんな認識を持って聞いておりました。ということでございまして、今後、この種の学校をさらに 2 校ぐらいは増設をしたいというご意向と伺っております。ご参考までに申し上げたいと思います。

それが報告でございますが、それでは次に、ちょっと私の発言の訂正をさせていただきながらお願いをいたしたいと思います。先ほど熊谷委員からのご指摘がございましたし、以前には小林委員からの、そういう内容についてのご指摘がございましたが、このところ、私も上農高校の定時制、それから諏訪実、これは学校そのもの。それから赤穂高校の定時制等を参観させていただきました。それなりに課題もあるなと感じました。同時に、「長野県にふさわしい多部制・単位制高校について」という資料でございますが、これをダウンロードいたして確認をさせていただきました。

その結果、私の個人的な意見でございますので、多部制・単位制の設置の是非というのは、どうやらこれはありきかなというふうに私自身は考えておりました。先般、いわゆるチーム編成、グループで検討いただくというふうに考えていましたが、むしろ教育の内容についての議論を今後やっていただく。先ほどの総合学科についてかなり出ましたが、そういうことでやらせていただくということにして、設置の是非は今日、ここで皆さんのご意見をさらに、もう一回拝聴して、どちらかと言えば委員長個人とすれば、設置方向でやらせていただくようにしていきたいというふうに思っております。これについては過日、特に先生方のご意見を申し上げますが、先生方も含めて全員の皆さんからご意見が頂戴できればありがたいなと考えています。

なお、先ほど、その内容について資料の提出というふうなご要望がございましたので、即刻、すぐに結論をとというふうに行くかどうか分かりませんが、意向として頂戴しておきたいなと思いますので、よろしくお願ひしたいと思います。

(岡庭委員)

その前に、現在の定時制の卒業率というのは分かりますか。

(篠原教育幹)

卒業率を、このように考えております。

例えば年度に入ります。入った生徒たちが3年後あるいは4年後、あるいはそれ以降ということもありますが、卒業している割合。つまり入ってきた人が云々ではなく、同時に入った生徒がともかく3年かかろうと4年かかろうと、あるいは以上かかろうと卒業している割合ということでございます。それで見てまいりますと、これは全県ですとまだ正確な数字が出ていないわけですが、例えば先ほど話題に上りました松本筑摩高校を例にとってみますと、およそ5割弱、これは昼間定時ですが、5割弱。それから夜間定時の場合ですと、3割強といったところが定時制の卒業率。今私が申し上げました卒業率になります。ただし、この数字は学校によりましてかなり違います。ですから、例えば全県平均を出してもそれほど意味がないことなのかもしれませんが、学校によって違うということは言えます。例えば6割を超えているような学校も、もちろんございます。

(岡庭委員)

6割を超えているのはどの辺ですか。

(篠原教育幹)

これは、上田高校でございます。そんなところでよろしいでしょうか。

(岡庭委員)

第三通学区の中では、長姫や、あるいは箕輪工業はどうですか。

(篠原教育幹)

たまたま資料を私は今、第三通学区について持っておらず申し訳ありません。

(池上委員長)

これは、準備をもしできれば、これはデータとして出るのものですからいただければと思います。

(篠原教育幹)

分かりました。

(池上委員長)

ほかにございますか。

(藤本委員)

前回から方向がかなり変わってきたわけですが。多部制・単位制高校については、委員長さんは設置するということですか。

(池上委員長)

そうです。

(藤本委員)

前回も、ちょっと発言しましたが、多部制・単位制に対しては、私と小林委員さんが二つの方向性を出したと思います。私も多部制・単位制を設置することを別に全面否定するわけではないが、熊谷委員さんとも言われましたが、非常に細長い、しかも三極化した、第三通学区ですので、場所の問題もありますし、もう一つは、何としても頭から離れないのは、確かに都市部の静岡、富山でしたら事情は分かりますが、独立校として考えた時に、前回も、「何名の生徒の需要があるんですかと」聞いた時に、県教委の方は「それは分かりません」と。少なくともクラスは1、1、1と、クラス数を言われるだけであり、どの程度需要があるかというデータは一切持っていないわけで、独立校としての不安がある。

小林委員さんも前回言われましたが、どこかの併設でしたか。全日と併設した場合の条件はよく分かります。校舎さえ独立しておれば、それほど大きな問題はないのではないかな。というのは、私も定時制に2年間おりましたが、当然5時から授業でしたが、その前にはもう補習をやっておりますし、定時制の場合、体育は、全日と重ならないように、後半の4時間目に持っていくとか、そういう授業編成をやっておりますから、校舎さえ独立しておれば問題はない。独立した高校にして、どれだけ生徒が集まるのか。確かにスクーリングの人数、通信の人数は、非常な数で、便利になるが、でも現在ではどこかの会場をお借りしてやっているということですので、独立した学校というのは気になる。

もう一点は、前々から言っておりますように、既存の定時制で4割を含める、100日以上欠席している重度不登校生に対応できるのか。例えば熊谷委員さんが言われたように上下伊那の境目に持っていった時でも果たして対応できるか。この二点が私は一番引っ掛かる。以上です。

(池上委員長)

まず、これについて事務局からご意見ございますか。

(吉江高校教育課長)

たまたま、よその県の例示がありますので申し上げたいと思いますが。長野県と比べて割合と交通事情があまり良くないと思われる、よその新潟県。新潟県の資料を過日、ほかの推進委員会でお出ししたのですが、新潟県の場合には多部制・単位制高校を7校、単独校ということで配置してございます。

新潟県は基本的に夜間定時制がだんだんなくなりまして、方向とすれば単独校としての多部制・単位制に移行するということの中で、今申し上げた7校の中でも夜間定時制がある学校というのは、3校のみが夜間定時制がございまして、あとはほかの学校の場合には午前・午後部の2部の多部制・単位制の単独校であるということだけ、取りあえず情報としてお伝えしたいと思います。

(池上委員長)

ありがとうございました。ご意見いかがですか。

先ほどの熊谷委員のお話について私も、ずっと悩みました。結局、生徒の問題なんですね。確かに、目的を持った生徒ということもあるんでしょうし、勤労学徒の問題。こういうところで定時制の存在価値があったり、また多部制・単位制の存在価値を今やっているということでございますが。

実際は、学校に行ってみて、どちらかと言うと、先ほど藤本委員がおっしゃったようなところがいわゆる中心でございまして、やはりこれは、この層の生徒というのは、これから決して減らない。ある意味では少し増えるのではないかというふうな認識を、資料にも書いてございますし、また先生方のご意見からも、うかがえるところでございますので、その点はあまり深追いをした発言が難しいところですけど。これはどうしても必要で、さすれば、今の定時制が悪いかということになるわけですが。定時制を今よりはさらに良いものにするというふうな姿から考えていきますと、このような学校を導入していくというのは、これは必然性が高いのかなと思って個人的な意見を申し上げたということでございます。

先ほど、財政問題を含めて、そちらの意見は私はむしろ財政は、意見としてはやっぱり、かかるべしというふうな意向を持っていますので、なるほど、そのとおりだと思います。しかしながら、そここのところは、そこそこの議論に収めていきたいなというふうに考えておりました。大変悩んでおりましたので、申し上げました。

(関 委員)

どんな教育システムでも完璧なものはないわけですし、それぞれ良いところ、あるいは問題点というものは含んでいると思うのです。そういう中で、今不登校の問題あるいは進路の多様化が問題になっておりますが、そういったものに対して少しでも有効である、あるいは少しでも教育的な可能性を多く提供できるなら、私はこの多部制・単位制というものを設置すべきだと思っております。

その問題点については、これからどこに設置して、どういう教育課程にしてということを考えていく、その段階で解決し、より良いものをつくっていけばいいのではないかと思います。

募集人員のことについても、今この静岡の例を見ますと、非常にゆとりもあって魅力的な部分もありますので、希望者はかなりあるのではないかと私は個人的には思います。

それから、静岡と違って長野県、特にこの南信は非常に地域が細長くて通学も困難ですが、通学に時間がかかるような地域の生徒は午後部あたりから選択すれば、そんなに朝早く出てこなくても良いと思いますので、そういう点でもメリットもあるのではないかと考えております。以上です。

(池上委員長)

ありがとうございます。

(熊谷委員)

多部制・単位制も総合学科もそうですが、ちょっと総論的な話になってしまって恐縮かもしれませんが、必要かどうかという議論についてはいろいろあろうかというふうに思うんですけれども、塩尻志学館高校の2ページの一番下、総合学科へ転換した背景のところにも、地域関係者の指導力と力強い財政的支援が大きかったと書いてありますが、変な話、地域の教育にどういう形態が必要かという議論というのは、やっぱり地域がずっと先だと思うんですね。

下伊那農高校に昔4年制の昼間の定時制がありまして、私は記憶にありますけど、私が高校生ぐらいですから、三十何年前にあった。それが廃止されて夜だけの定時制となって、その背景が言ってみれば就学困難な生徒の働きながらの勉学を確保するという時代があった。現在の定時制が、そういう位置づけかという、そうではないというのはあると思うのです。それもやっぱり地域の中でいろんな議論があって、こういう高校をつくられてきた。例えば下伊那農高校の昔は農業科、林業科、生活科といったら今ではアグリ云々とかいろいろな学科に変わってきている。というのは地域の中でやっぱり地域の子どものニーズがだんだん十分な議論をされてあったとか、教育というのはそういうふうにあるのではというふうに私は思うのです。

今回、多部制・単位制については、私はやはり必要性はある分もあると思うのです。先ほど言いましたように、新潟では7校持っている。静岡は、これは多分県下で1校です。それは、それぞれの地域事情であってもいいと思うんです。新潟は7つある。それは、そういう施設は必要だろうと。ところが長野県の場合は、なぜか4校つくるとするのは、まず前提である。総合学科についてもそうです。地域で、この塩尻志学館の場合は、塩尻高校をどういうふうにしていくかという検討をする中で、総合学科が出てきた。ところが今回はあくまでも県教委で「4つつくりなさい」と。「それはここですよ」というふうに決められている。では地域にしてみると、箕輪以南を中心にした上伊那の皆さんが、多部制・単位制をやっぱり必要としているんだという議論をやっぱりされるべきではないかというふうに思うわけでありましてね。だから、やっぱり例えば定時制も、この第三通学区では現実に6校あるわけですかね。こういうものも何か県教委の案を見ますと、

多部制・単位制を作りながら、この定時制も確か維持していくという案になってきていますね。これは果たして、こんな中途半端なことでもいいのかどうかという…。

（池上委員長）

維持ですよ、その候補案は。

（熊谷委員）

いや、確か維持ではないですか。一部は維持していくという確か。だから、もう少し地域に合った姿はどうなのかという議論がやっぱりされないと、「多部制・単位制をとにかく南信に1区つくるのだから、どこにつくるんだ」みたいな議論ではなくて、もうとにかく多部制・単位制がこういうもので、つくるならその姿はどうかなという議論も、もう少しされるべきではないかと思います。何か「ありき」の議論があまりにも先行しすぎてしまっていてという気がしますので。ちょっと、そういう気がしました。

（池上委員長）

ちょっとお話ししますけど。「ありき」では、ないですけど、どうも、まだ分からないということですから、「ありき」ではないということです。

（熊谷委員）

ですから、あくまでも県教委で、県内に4つ配置するとしたら、とにかく第三通学区は1校を箕輪にして下さいと、これが「ありき」みたいな雰囲気になってきてしまっているという気がしているので、そうではなくて、もう少し地域で議論すべきではないかなと思っています。

（篠原教育幹）

今の塩尻志学館高校総合問題についての冊子をお配りした分をご覧いただきたいと思うのですが。塩尻志学館高校は確かに、ワインという学習心がありまして、それは地域と連携してということがございました。

実は、塩尻志学館高校を総合学科に転換するという時には、はっきり申し上げまして地元の皆さんは反対でございました。というのは、せっかくここまでワインというものを、一つの学科として展開してきたにもかかわらず総合学科にする。1クラスがすべてワインにかかわってましたから、3年ですと、40、40、40、120名がワインというものについてはかかわっていたわけです。ところが、当然総合学科になりますと人数が減ることが分かっています。つまり40という数字は集まらない。現に、現在40という数字は集まっておりません。集まっていないという、要するに従事する生徒の人数が減ってしまうということで反対だったわけですね。しかし、実際に今、1学年、とても40名の生徒がワインにかかわっておりません。学年によって違いますけれども10名から20名の間というふうに思います。しかし、では今、地域の方々がそれについて非難したり反対しているかというとなったく逆なんですね。つまり、少人数でも、そのワインというものについて深い知識、深い研鑽。そういうものを積みたいという生徒たちが勉強していく。そういう中で製

造についても、あそこは販売という、非常に珍しい販売権まで持っているわけですが、製造から販売というものがきちんとできていくということでもあります。

そういう中で、例えば第四通学区の推進委員であります小口・塩尻市長も、塩尻志学館高校の生徒が毎年ワインの本場フランスへ短期留学する。これに対して援助すると、こういったことをやっているわけです。つまり、一つの仕組みが変わる。確かに非常に違和感のある仕組みになっていくということで、反対は当然のことながら地元である。それで賛成ばかりではないということはお分かりと思いますがやはり、その中で生徒たちがどんなふう to 成長していくかというあたりが、やはり地元の皆さんは最終的には一番関心のあるところだと思います。

そういう中で、志学館の場合は生徒たちの成長というところで、あるいはその冊子の 3 ページの上のほうに、転換した背景の中に非常にいろんな発見がありますが、上から四つ目ですね。やはり全体的な学習意欲の喪失、それから不本意入学および学校不適應への対応というのがあります。これは現にありました。こういうものが解消されていく。解消されていく中で、やはり地元の皆さんの信頼と相互納得があったという声が上がってくるというふうなのが塩尻志学館高校の現状であるということが言えると思います。

(小坂委員)

今、この多部制高校とごっちゃになっていますね。どっちを今やっているんですか。多部制ですか。

(池上委員長)

総合。

(小坂委員)

総合がこの次の、どうもそこらへんがいろいろな意見が出てきているんですが。

(池上委員長)

ただ、先ほど、この資料の質疑ということでございます。

(小坂委員)

では、いいですね、多部制。私は弱小な上農高校の定時制の委員長を仰せ付かっているのですが、行ってみると、ほとんど職業を持っていない人が多いんです。ほとんどが職業を持っている昔の定時制とは差もある。先ほど静岡の例が出ましたが、これはもう静岡は東海道線沿いで非常に交通の便の良いところ。しかもまた浜松等で 24 時間勤務をやっている工場の労働者もいるのではないかとということで、これだけの生徒が集まるのだろうと思います。

私は先ほどの藤本委員の意見にもありましたが、これだけはどうも不安ですね。これだけのものを長野県内に 4 つつくるのがいいのかどうか。果たして集まるのかどうかということを、いろんな職業の選択の中で、私はどうもそんなに要らないのではないかと。むしろ今の定時制をきちんと整備していったほうがいいのではないかと。統合していったほうがい

いのではないか。

私は上農高校へ行くのですが、まあ、まったくお粗末ですね。設備そのものは、まったくあそこで本当に高校教育をやっているのかどうか。それは委員長さんも見られて、思っていると思います。ですから、そういうことで多部制高校を、一方、つくることが必要なのかどうか。むしろ私は定時制の統合なり、上伊那に3校あるわけですよ。駒ヶ根と上伊那の例で言うと上農高校と箕輪ということの中では、むしろそれを統合してしっかりお金をかけて、それでさっきご意見があったように、必ずしも独立校とせずに併設でもいいのではないかなという気がいたしますけどね。

（小林委員）

私はこの推進委員会の考えるべきことは何なのかということから、まず前提から私の考えを言いたいのですが。今、諏訪に1校設置すべきだとかということとは、今回もそうだと思いますが。そのことが、それはもう既に決定だということに進めていくことではないと思うんですよ。検討するところですよ。だけど、ある程度目安がないと話が、イエス・ノーのままで、賛否両論だけで行ってしまうと困るから、方向だけは示した上で、さらに検討していく必要があると思います。そういう意味で言うと、単位制・多部制については設置の方向で検討するということは私は賛成です。

ただ今後考えていかなければいけないのは、三つの前提がこの場合あると思います。一つは、もう三通の定時制もいくつか、もうそのままの中で設置せざるを得ないという非常に限定的な条件がつくられている。さっきの静岡や、ちょっと新潟のことは分かりませんが、この前の富山にしてもかなり広い通学圏から来る学校を前提にしていますから、三通の場合はほとんど、それは参考にならない。それが大前提の一つですので、つくる場合は、まったく三通独自の考え方でやっていかないと、私は失敗するなということが前提の一つです。

それから二つ目は、一番忘れてはいけないことは、総合学科もそうですが、特にこの多部制・単位制は魅力ある学校づくり、これがすっ飛んでしまったのでは、こんな学校は要らないという地域になってしまうので、あくまでもこの中身で魅力ある学校になるのかというのが、我々が一番考えなければいけないことかなと、それが前提の二つ目です。

それから三つ目は、同じく関係するのですが、特に総合学科も、さっき言ったように地域の受け皿がどうしても大事ということがあったわけですが、この多部制・単位制は、さらに地域が本当に前向きに受け入れてくれることが条件です。そうならないと、特に、その性格上、ほかの学校をつくるのとちょっと違うかなと思います。この大前提の中で今度は、どういう条件を考えていけばいいのかというのが、我々が今後検討すべきことだと思います。そして、その上で、どうしても魅力ある学校づくりが無理だということになれば、それはつくらないということもあるかもしれませんが。とにかく私は、まず方向を決めて、そこで十分検討する。したがって、藤本委員が出しているような問題点については、しっかり我々がつかんだ上で、三通独自のものをつくって、「あそこと同じようなやり方」とかではなくて、そしてそれが本当に可能かどうか。可能ではありませんということになれば、それはもうダメだろうということだと思いますので、いろいろな、さっき言った既学科併設とかいうのも、あくまでも、ここの三通独自の考え方だと思いますが、そういうことが

本当に可能かどうかということ、その他いろいろ検討することが必要です。心配な点がいっぱいあると思いますので、それを出していったら、それをどうすればクリアできるのかというのを、私はここで、うんと検討すべきかなと思います。

それで、どうしてもクリアできないとすれば、反対の方がおっしゃるように再編すべきではないが、今、推進委員会のほうで「つくる」、「つくらない」と今の段階であまり議論しても生産的ではないなと私は思いますので。以上です。

（岡庭委員）

話を元に戻して申し訳ないですが、今度の推進委員会に出した県教委の方針そのものが、非常に粗雑だということなんですね。地域の実情をしっかりとらんで、どうするかではなしに、総合学科を一つずつつくとか、多部制・単位制を一つつくとかということが前提にあるわけです。

先ほど小口さんが言っていたように、普通高校の中に総合学科を取り入れていくべきではないかと。これは例えば私は産業界からの要望もあると思うのです。今の普通教育、通学区を越えたりする不満。第三通学区の方で、どういう教育要求が産業界や保護者やあるいは生徒の中にあるのか。その上に立って、どうなのかという話の議論ではないから、多部制・単位制高校だという何か我々が多部制・単位制に変えたら何か学校へ行けない子どもの受け皿として多部制・単位制高校というふうにしかなじめないと、今の実態だと思っているんですね。

だから、そうすると先ほど小坂さんが言ったように定時制との問題はというふうにするのか。では今、定時制に変えると子どもたちは多部制・単位制高校ができた場合は、本当にそこへ行こうというふうになるのか、思わないのか。その子どもたちは、今というふうに考えているのかという調査もしていないということです。

特に、この冊子を私は読ませていただいたのですが、何で珍しい多部制・単位制高校について一番議論にしているところは地域社会のニーズにどう応えるのか。そういう全体的な傾向の中でコミュニティ・スクールとしての高等学校をどういう形で位置づけていくのかという議論をしましょうと書いてあるわけで、そのところで、やっぱり今本当に地域の中で、こういう高等学校を望むという形の議論がなされているのかどうかということを考えると、まったくなされていないで、多部制・単位制高校がいいのではないかという話になってきているというふうに思っています。

その点で、かなり定時制の子どもたちの意向調査のようなものが県教委としては、されたのかどうか。もし、されていないとすれば、もう少し、やっぱり地域の中にどういう教育ニーズがあるのかということ、この推進委員会で、戻ってというと、また委員長に怒られますけれども、若干そこらの議論をしてもらおうということも本当に大事ではないかと、私は思っています。

だから多部制・単位制校が必要なのか、必要でないのかという議論よりか、もう多部制・単位制高校に対するイメージも、個々まちまちだということもあるのではないかということを含めて、この非常に立派な検討委員会の報告書をずっと読ませていただいて、今そんな感じがしているところです。

(池上委員長)

ご意見、よく分かりました。実は私もこの文書の中に、2ページにございまして、平成7年の11月に同じような文章が出ているということですが。これについては、多分、深掘りをしていただいているのではないかとおもうのですが、こういうふうな流れがずっとあったということも事実でございまして。失礼の段はお許しだとすれば、私ごとき者となって、首長の皆さんや行政の皆さんが、こういう報告書が出ているのに、またその議論が実際はあまりよく行なわれなかったのではないかとおもうのですが。

(岡庭委員)

それは、そうです。

(池上委員長)

それはちょっと、行政の皆さんにも責任があるのではないかなというふうに、実は思っていますね。

(吉江高校教育課長)

そうですね。たまたま、ちょっとそんなお話も出ましたので、もしかすると、余計なお話かもしれませんが申し上げたいと思いますが、実は、私は多部制・単位制高校について、一番認識を深めているのは、この第三通学区ではないかと思っております。と申しますのは、私が記憶している限りで、平成15年から飯伊地域の教育7団体の陳情の中には、「早く多部制・単位制高校を設置せよ」と。さらには「この広い第三通学区では、多部制・単位制高校1校だけだとエリアをカバーできないから、2校設置せよ」というようなご要望をいただいている地域が、このご当地であるということだけは若干補足させていただきたいと思います。

(池上委員長)

それでは、ちょっとここで一休みしましょう。では11時から再開をいたしたいと思いますので、よろしく。

【休憩後再開】

(池上委員長)

それでは、皆さまおそろいですので、再開いたします。

(藤本委員)

今回の高校改革はすべて19年度からスタートという県教委の方針で、すべてここからスタートするというのは何とも納得できない、徐々に段階を追いながらやっていくというのが当然である。私は多部制・単位制の良い点は認めますが、但し、二点だけ、独立学校として成り立つのか、それから定時制の非常に困難な生徒たちに対応できるのか心配である。定時制をつぶしていいのか。第一段階として、例えば七区、八区、九区の定時制に昼間部

を設ける。併設する。夜間部だけではなく、午後部を併設する。それで生徒が集まるか集まらないか、状況を見る。今の現状の定時制だって、始業前授業ということでお昼から生徒が来てやっている学校もあるわけです。七区、八区、九区の、どの定時制にするか分からないが、そこで昼間部だけ、多部制でやってみて、生徒が沢山来るようになり、NPOや地域のバックアップが得られて盛り上がっていくようだったら、最終的に、何年後かに独立校にするとか、または少なかったら校舎一つだけとか、段階的な実施についてぜひ、事務局にうかがいたい。一度にドンというのは何とも納得できないし、不安があります。

（吉江高校教育課長）

基本的には私どもは常日頃から、これは5月の29日に第1回目の推進会以来、お願いしてございますように、スケジュール的には17年度中に実施計画が策定できれば19年度からスタートしてまいりたいというのが基本的なスタンスにあったのでございます。

それを、現時点におきまして、このスタンスが変更があるわけではないですから、その点でご理解をまずはいただきたいと思っています。

それと、今お話がございましたように、併設というお話がありましたが、私どもはあまりいろいろ申し上げますと若干刺激になりますますが、89校ある学校を、まず75校にしよう。それで75校にした上で、ただ多部制・単位制の設置も必要ということで各地区に1校ずつつくっていきこうというスタンスで、75プラス4で、79というスタンスに立っております。それを考えますと、今委員さんからお話がございましたようなやり方を仮に取った場合には、まずは75校体制を整備して、その上で議論していくという形にならざるを得ないのではないかと考えている次第でございます。

（池上委員長）

はい、重要な意向が示されましたが。今の多部制・単位制のお話で、ほかにご意見ございますか。

（熊谷委員）

先ほど、吉江課長から、いいお話をいただきました。飯田・下伊那が何か多部制・単位制の要求を従来からしていたと…。

（吉江高校教育課長）

飯田にも1校ということですね。

（熊谷委員）

そういう経過を私は知らなかったのですが、そうであればぜひ、持ち帰って飯田・下伊那で多部制・単位制が必要なのかどうかという議論をしっかりとしたいと思いますので、日頃から言っているように、やっぱりこの飯田・下伊那の第三通学区は広いわけですから、独立設置にすることは可能かというのも含めて、ぜひ検討してみたいなというふうに思います。

先ほど資料の修正をもらいましたけど、伊那大島から箕輪まで67分ですので、飯田で

すと間違いなく 1 時間半、天竜峡ですと、2 時間以上かかりますので、ぜひそのことを含めて検討していきたいと思います。

(池上委員長)

しっかりご検討ください。結構でございます。

ほかにございますか。

それでは、先ほど小坂委委員からもご発言がございましたし、それから小林委員のほうからも、やはり問題点をしっかり整理して比較させるべきだということでございます。ただ、それがゼロということになって、設置方向で検討して、しかしながら、その条件がどうしても満たされないという場合には違う結論になるという方向で、本当は委員会を仕切る私とすれば、あまりやりたくないことですが、こういう方向で今日はまとめていきたいと思います。

先ほど、藤本委員からの、その趣旨に沿ったご発言だったと思いますので、そんなことにさせていただきたいと思います。関委員、そういうことで、恐れ入りますがよろしくお願いいいたします。それではありがとうございました。よろしゅうございますか。

それでは、総合学科の件について、今度はいきたいと思います。予め事務局から総合学科についてご意向、ご意見、その他がございましたらということで、お願いしてございましたので、その点について先にご発言をいただきたいと思います。

(藤本委員)

資料を用意してきましたので、総合学科についてよろしくお願ひします。

まず、全国の総合学科のアンケート結果について。過日北原(曜)委員さんから、総合学科には問題点もあるのではないかと、うまくいっていないところもあるのでは、そのデータを出してほしいと、県教委さんに言われたと思うのですが、県教委さんのほうはデータがないということでしたので、過去、データを見た気がしたので、データを集めました。これは私達教職員が所属している日本高等学校教職員組合が 2002 年度に全国の高等学校の多様化について調査を行ったものの中の、総合学科についてのアンケート結果です。

昨年の 8 月にファックスでいただいたものをコピーしました、各県ごとといってもどこの総合学科が回答したか分かりません。後半の北海道から下が総合学科です。それをまとめたのが全国の総合学科アンケート結果というところです。

これを見ていただければ、先ほど事務局から話がありましたが、良い点もあるし問題点もあるというのがよく分かると思います。評価する回答は、「不本意な生徒が大幅に減って、自分で選んだ生徒が多く、自分の意思で授業に臨んでいる」とか、「個性を伸ばした生徒もいる」とか、「進路に合わせて学校が楽しく生き生きしている」だとか、「国立大の入学実績が上がった」、「自分の時間割で興味があつた」とか、それなりに単位制の良さがあるとあります。

それから問題点ですが、問題点は委員の皆さんがご想像できるとおり、やっぱり単位制の問題点です。2 ページ目へ行きますと、やはり「楽ができる総合学科」だとか、それから「個性を伸ばすということは好きなことをやって嫌いなことをやらないということではない」といろいろ厳しい、これは教職員組合が調査したものですので、それなりに厳しい

回答があると思います。それから「苦手なものを頑張らせるというシステムではない」とか。「教員の多忙化」、それから「当初はお金が付くが、今はお金が付かない」、「施設・設備の不備」。そんな点がポイントということで、参考にさせていただければと思います。

もう一つ、資料を用意してきましたのは、「総合学科は職業高校に代わり得るのか」という、前回出した資料とダブるものがありますが、資料をご用意しました。

全国すべての総合学科をほぼ網羅して、そこにどんな系列があるのか、全部チェックしました。落ちている学校とか系列は埋まっていないところもありますが、数えてみたら 200 いくつかの総合学科がありました。

そのプリントの 1 枚目が結論です。私は総合学科を設置するのでしたら、先ほど小口委員さんが言われましたが、目的意識を持たないまま入学している都市部の困難な普通高校の魅力づくりとしては、非常に意義があると、そういう気がします。

私は、それからこの発言は今日する予定ではなかったのですが、もう一つ発言させていただければ、万が一県教委さんが下農と長姫を何としても総合学科にして、一つの学校にするというのでしたら、十歩、百歩譲っても、下伊那農業高校に職業科を残して、そこに総合学科のクラスをいくつか併せた下農にしてほしいというのが最大の譲る範囲内です。

あくまでも私は普通科の困難校の魅力づくりとしては意義があると思います。理由は職業高校への入学生の 7 割が目的意識を持っている。職業高校で私は授業をしています、国語とか数学の授業は、眠る生徒を起こしながら授業をしているのですが、機械を扱った実習になると目を輝かせている。それから小口委員さんがさっき言われましたが、学校教育法 41 条の実現です。やっぱり高校は職業教育も行うんだという点でも普通科の困難校が良いのでは。

2 番目です。職業教育というのは、系統性と順次性、それから授業をやったら実習実習をやったら授業、によって進化するわけですので、自由選択単位制ではやはり期待できないのではないかと思います。先ほども事務局から話がありましたが、系列というのは、学習の目安、グループを示しただけで生徒は系列に縛られないわけですから、そういう点で不安と思います。

それから地域産業と地域経済と職業高校は、結びついて根づいているわけで、やはり地域の声を聞かざるを得ないと思います。

この表は、すべて系列を全部コンピュータで検索して、全国 200 余の総合学科に系列がいくつかあるのか表にしました。参考にさせていただければと思います。

2 ページ目へ行きますと、普通高校と職業高校が半分ずつ、総合学科になっているのですが、あまりにも職業系の系列が少数だという気がします。1 ページの表を見ても、機械とか建築・土木、電気という系列は 2 校、3 校と、ほとんどないですね。ほかの機械系の系列は産業技術や製作技術とか、機械科の一つの科目のような系列になっているわけです。そここのところを見ていただきますと、割合を調べましたが、電気・情報系は何と 2.5%。土木・建築系は 0.9%。機械は 3.8% しかないわけです。ただ、ハードウェアを必要としない商業に関する系列はかなりあります。それから参考までに、対象になっている長姫高校の実績をそこに書いておきました。長姫高校のこういう実績を見ると、これは職業高校であるからこそ得られるものだと思います。

先ほども言ったように、私は普通科の困難校、目的意識を持っていない生徒が多い学校

ほどメリットがあると思います。事務局は多分、普通高校を総合学科にすると先生が増えちゃう、職業高校を総合学科にすればお金が減るといった財政的な理由と、もう一つは、普通科を総合学科にしても職業教育が出来ないと考えられていると思いますが、私は工業の教員ですが、小口委員さんは詳しいと思いますが、例えばNCの実習をしようとした場合、小さなパソコンと、このくらいの小さなNCもあるわけで、それから鋳造実習でも機械科のように鉄を溶かさなくても、アルミニウムだったら簡単な灯油のボイラーで実習ができるわけで、私は普通高校を総合学科にしても、きちんとした技術教育、職業教育はそれなりにできて、何も重装備型の職業高校を総合学科にして、機械科にある1千万円だ何千万円の本格的なMCだNCなんて装備する必要はないわけです。

最後はやはり、何としても譲るとしても、私は下農に職業科を置いて、そこに総合学科を何クラスか知りませんが併置した、そういう学校にしてほしい。これが最低の譲る範囲であり、職業系の学科をつぶすことには大反対です。

(池上委員長)

以上ですか。ありがとうございました。ほかはいかがですか。

(小林委員)

これは藤本先生よりも、小口さんや委員長さんとか企業の方にお聞きしたいのですが、この、大変素晴らしい参考になる資料をいただいたわけですが。その問題点の私が非常に気にしているのは、7、11、12、13、この辺のところが一番心配するところであります。

つまり子どものニーズから言うと、非常に総合学科は魅力あるシステムになっているかなということは感じるんですが、では実際に本当に社会に生きて働く力をつけていくという点で、ああいうやり方をしていく時に、例えば体系的な学習というものがなくなる可能性があるわけですね。

それから、どうしても嫌いな教科は避けてしまうということもあり得るわけで、その辺のところが目的意識を持って、やる気という一面、良いところがあるんですが、その辺のところが大丈夫なのかなという心配があるので、ちょっと特に企業の方にお聞きしたいのです。

(藤本委員)

でも、現実には系列を選ぶ時は、かなり先生方が、こういう職業をしたかったら、ぜひこの系列の科目を選びなさいといった指導をしている。現実には、そういう問題があって、全国のアンケート調査にもありますが、例えば志学館高校では、先ほど県教委の方の話がありましたが、系列は何もコースではないから、生徒は属さなくても良く、好きな科目を選ぶわけですが、かなり先生方が、例えば情報を勉強したい人は、ぜひこの科目とこの科目を、こういう順番で選びなさいと、かなりの指導をしているわけですね。だから生徒がふらふらしないような指導を現実にはしていますが、そうは言っても生徒はふらふらしていいわけです。単位制では。そういう心配があるということで、志学館高校に私は何人も知り合いがいるので何うと、押さえると言ったらおかしいのですがこういう授業を受けたら、こういう職業に、ワイン関係の進路を目指すならこういう授業を受けなさいと指導し

ているのです。

（小口委員）

先ほど私、質問しましたが、やはり総合科の良いところは、どうも自由度のある点だということなんですね。普通学科では、それができないということですから、そういう意味ではいろいろなことは総合学科なら考えられるだろうなと思っております。

体系的な学習ができるかという部分と嫌いな学習を避けるという、そういう部分でいくと、確かにその体系的な学習というのは、ちょっと心配はあるということかもしれませんが、先ほどのような自由度の中で、どのようにそれを考えながらプログラムをつくっていくか、あるいはフォローするかということができれば、ある程度のことはできるのではないかと思います。

それよりもむしろ、そういうものが好きだというような子どもをどういうふう to 育てるかというほうが、子どもたちの伸びというか、あるいは興味を非常にそそることによって、その次の例えば大学ですとか、あるいは仕事の中に入っても、力のある子どもができるのではないかなと私は思います。

工業高校などを考える場合には、例えば技術的な面とか技能的な面、それからあとはセンスを磨く。そのようなポイントがあるように私は思っておりまして、結構いろんな工業高校でもロボットコンテストとか、そういうのに挑戦していきまして、これはどちらかと言うと考える力を養う技術的な、そういうことだろうというふうに思います。

ただ問題は、技能的にどこまで深い知識を身につけてやるかということが難しくて、ドイツなどは結構、マイスター制度みたいなのがありまして、このマイスター制度というのは非常に幅が広いんだそうですね。ものすごく幅広い範囲の中での知識を身につけながら自分はこれをやっていくという風に技能を深めていく。こういうことですから、なかなかマイスターと高校とを比べることができるかは分かりませんが、そういう意味での知識の幅というのは非常にあるんですね。ですから工業高校といえども、やはり組織化としては、そういうものはベースにきちっとつくってもらいたい。そのためには、ある程度自由度がある中で選択肢があったほうが工業的にセンスも出てくるし、原理原則というものも幅広く人間として身につけることができるのではないかなと、私は思っているわけです。そんなところ です。

（池上委員長）

よろしゅうございますか。私は少し違う側面でお話しをさせていただきたいのですが、こういう組織に帰属をさせていただきまして、大変勉強になったわけです。

いわゆる産業社会では、かなり日進月歩で対応が進んでおりまして、よく出てくるのは例えばトヨタの方式とかですね。ああいうようなところが多く語られておりますが、産学で、そういう議論が旧来、果たしてなされているだろうか。大学へ行くと、かなりそういう側面があるかもしれませんが、そういうふうなことです so、やや産学で交流がなさすぎたのではないかなと。言い換えますと、今日現在ある学業としての進歩性のあるところと、それからいわゆる現業で我々が持っております能力と、もう少しうまくシナジー効果が上がるような教育ができると、私は助かってくるのではないかなと思います。

その一つの方法として、インターンシップの方法だとかいうようなことがございましょうし、それを発展的に考えれば、もう少し産学の例えば学生さんに職場に来ていただいて、工業を学ぶという社会が私は必要だと思います。重複いたしますので、しない部分だけ申し上げておきます。以上でございますが、よろしゅうございましょうか。

（小林委員）

藤本先生のお話と、今お二人のお話で参考になったわけですが。そうしますと、かなり総合学科の先生方が非常に苦労して、そういう指導をしてくれていると思います。その中で、一つの課題は先生方がかなりキャリア教育といいますが、この資質をつくる、そういうものをかなり研修の強化をしていかないと、これはえらいことかなということと、かなりこれは志学館でも前からそういう話を聞いていますが、非常に先生方が無理しているところもあるということになったときに、これがずっと持続していくには、もう少し手を打たなければいけないかなということと、人事の問題も考えないと3年かそこらで異動してしまうというようなことをしていると等の問題の検討が必要です。これは多部制・単位制もそうだと思うのですが、なかなか維持していくのは大変かなということが分かりました。以上です。

（小口委員）

ちょっと最初に確認をしたしましたが、総合学科の魅力というのは、やっぱり自由度だというふうに思うんですね。そういう意味では先ほど質問したのは、志学館の場合には結構いろいろな職業人が入ったりできているということですね。ところが普通科の場合には、先ほど何か法律の関係で、そういうことがなかなか自由度としてできないということですから、むしろ総合学科のほうが社会人が学校に入るということは可能だと私は理解しましたが、それでいいのでしょうか。

（池上委員長）

では、そこだけ一点。

（篠原教育幹）

やはり今日の資料ですが、16、17 をご覧いただきたいと思います。志学館の資料です。これは「産業社会と人間」、それから「キャリアプランニング」、それから「キャリアデザイン」産業社会と人間が1年、それからキャリアプランニング2年次。それからキャリアデザイン3年次と、ここに内容が載っております。これらの内容の中で、使えるという言い方は語弊があるでしょうか。お願いできる社会人講師、これはすべてのところで社会人講師をお願いしているということでもあります。ただしセットになっておりますので、例えば1限目に社会人講師の講演なり話を聞き、連続で2限目にそれをまとめたり、あるいはそれに関するレポートを書いたりという形ではあります。そういう意味では、この部分が保障されているというのは、やはり普通科の高校と違うところということが言えます。

ちなみに普通科高校の場合は、おそらく週に1回ロングホームルームの時間があります。このロングホームルームの時間は様々な形で使わなければならないわけですが、その中の

一部、数時間を割いてこういった、いわゆるキャリア教育、これをやると。これもきめ細かくは、とてもできない状況もあったりしますので、学年全体でやるというふうなのを年間行事の中に位置づけてやる。その辺は大きなところだというふうに思っています。

（池上委員長）

ありがとうございました。

（北原曜委員）

藤本さん私のちょっとした質問に丁寧に答えていただいてありがとうございました。非常にこれは参考になるアンケート結果だと思います。

それで、そもそも論から始めてしまって申し訳ないのですが、今県立高校で問題点になっているのは、一つは普通科の習熟途上校。それからもう一つは不登校。不登校の方は、先ほどありましたように多部制・単位制のほうで対応していくと。もう一つのほうは、習熟途上校の向学心がない、進路をあまり考えていないというような生徒に対する対応として、総合学科というのは非常に私は有効だと思います。これはぜひ、一つと言わず二つとか三つとか、つくっていただきたいと思っています。そもそも、この総合学科というのは広く浅くという形がちょっとあるわけですね。だから職業科とは一線を画すというところがあるかと思っています。

そうしますと、こうやって向学心をつくり出していくということで非常に有効なので、そもそも、なかった向学心を育成していくということが非常に大きな点ですから、この総合学科に職業科と同じものを求めてはいけないと思います。

それで、総合学科校をつくるにあたって二つの方法があるわけですね。一つは職業科のある高校を改変していく。もう一つは、普通科の高校を改変していく。普通科のほうの改変には施設に非常にお金がかかるわけです。先ほど言っていましたように、ある程度の施設は必要ですから、施設とか土地とか必要になってくるわけですね。もう一つのほうの職業科は、これは施設はあるわけですからいいのですが、それでいいのかなと。職業科を一つなくすということは専門としている学科をなくして、浅く習熟する学校をつくり出すわけですから、そこで専門性が若干失われていくわけですね。それで社会のニーズとしていいのかなという疑問があります。その二つの方法について、ちょっと議論いただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

（熊谷委員）

今、北原曜先生もおっしゃいましたし、藤本先生の資料もまさにそのとおりだと思うのですが、今、飯田・下伊那でやっぱり一番議論になっているのは、名前が挙がってしまった部分の問題なのですが。その中でぜひ皆さんに認識していただきたいのは、飯田長姫高校という高校は商業と土木・建築という、非常に特色ある学科を持った高校として戦後ずっときているわけですね。本当に藤本先生に資料をつくっていただいて嬉しいのですが、2番目にあるように、まさにいろんな場面で生徒は活躍してきているわけでありまして、ましてや、私どもの地域では高等学校全国優勝したのは飯田長姫高校だけでございますので、飯田市は知らなくても飯田長姫高校は知っているというふうな全国的な知名度でござい

すので、この名前をなくすということは地域にとって非常に素晴らしいプレッシャーになる話でございまして、そういった歴史・文化も一つは慎重にしてもらいたいと思うのですね。

そういう意味では、私どもの地域で今やられているのは、やっぱり農業高校、商業高校、工業高校という三つの専門高校がきちっと飯田・下伊那地域に配置されていると。このことはやっぱり非常に意味があることだろうと言われておりますので、ぜひそういった意味で長姫高校ないし下伊那農業高校、飯田工業高校が地域の中で今まで果たしてきたこと、またこれから果たそうとしていること。ここをやっぱり地域としては本当に大事にしていきたいというふうに思っていますので、ぜひその点は、総合高校云々という議論も次として、とにかく名前が挙がってしまっているのも、そのことの認識だけはお願いしたいと思います。以上です。

（池上委員長）

ありがとうございました。それでは北原曜委員のお話について、そもそも論のところをお願いします。

（吉江高校教育課長）

一つとしまして、今北原委員さんからお話がありましたように、いわゆる普通科を転換する場合と、それから専門高校を転換する場合は、まさしくおっしゃられるとおりだと思います。ただ、専門高校を転換したほうがお金がかかる、かからないはさて置きまして、資源がございますので、いろんな意味での系列を設置することが可能ですから、そういう意味では多様な要望には応えられるだろうということを考えています。

それで、委員さんがおっしゃられるような専門性につきましては、先ほどもちょっと志学館高校の例示でも出ましたのですが、系列をベースに学ぶ場合、当然そういうような進路指導という言葉がいいのかは別としまして、先生の指導も行った中で、それを専門的に学べば、より専門的な知識は当然習得できますから、そういうような方面に進学あるいは就職もされるというような現状は維持できるかと思っています。

それともう一点、以前お配りしたアンケート調査の中に、お手元がない方の場合には、またお戻りいただいてからご覧いただきたいと思うのですが、中学2年生のアンケート調査の結果と考察というようなものがございます。これは私どもが検討を加えました平成15年の11月に実施した内容ですが、その問1に出てくるのですが、「志願学科・課程は何ですか」という問。それに対しての答ですが、普通科系が圧倒的に多い。それで、それに対して、例えば工業系は9.4%のアンケートの比率に対して現状において10.4。それで農業系はアンケートの比率でいきますと、志望が2.5に対して募集定員は6.4というようなことで、全体的なイメージのかい離というのは現状においてはございます。これが一つの中学生の本当の気持ち。それがその後の学校を選ぶにあたって、当然2年生の段階ですから3年生に至って変わってくるんだろうと思っています。

例えば総合学科につきましても、アンケートの比率でいきますと5.2に対して、当時現状は募集定員は1.3しかなかったというような状態も出ております。その辺はやっぱり考えていかなければいけないかと考えておりますし、また確かにこちらの第三推進委員会に

おきまして専門学科につきましてご議論いただいていると、違うサイドで申し上げますと、ほかの委員会ではむしろ専門高校よりも普通科を増やすべきではないかというような議論もあります。その議論も一つの根拠になったのが、先ほど私が申し上げましたアンケートでありまして、こういうようなアンケートを見ると、やっぱり中学生の本当のところはこういう意図があるのかと。それがなかなか進路を決定しづらい段階での普通科を求めるといような一つの方向にもなっているのか、あるいは総合学科への希望につながっているのかなというような発言もあったということは加えさせていただきたいと思います。

（池上委員長）

今のお話のところはちょっとつまらない感じだと思いますが。

（北原曜委員）

結局、中学生の段階で進路を確定させるというのは非常に難しいと思います。中学の段階でもう職業科のほうの選択をするというのは、ものすごくほかの皆さんはこぞって普通科のほうへ行くわけですから、孤立したような気持ちにもなるでしょうし、非常に不安だと思います。

そういうことを考えてみますと、「取りあえず普通科」という生徒がいっぱいいるのではないかと思います。その「取りあえず普通科」の子どもたちは、いわゆる明確に将来大学へ進学してどうのこうのというのではなくて、高校の中で考えていきたいということだと思っんですね。そういう意味で、総合学科というのは非常に有意義な学科ではないかと思います。そのように考えていきますと、本来普通科として向学心がそれほどない生徒たちが行くところを総合学科校として変換していくほうが、本来の筋であろうというように気がします。

最終的な結論は普通科にそれぞれの選択するコースがあって、最終的な結論は同じですが、職業科を廃止して総合学科にするのと、普通科を廃止して総合学科にするのは、かなり違う意味合いだと思いますが、どうでしょうか。

（池上委員長）

どうでしょうか。

（北原曜委員）

この中で議論してもいいのではないかと思います。今まで県教委さんといろいろやり取りをしていますが、そうではなく推進委員さんの中で議論というのもいいのではないかと思います、いかがでしょうか。

（池上委員長）

それでは課長さん、今お話をされるようだったですか。

(吉江高校教育課長)

塩尻志学館は前身が、いわゆる農業と普通科と、それから家政科が入っていた学校だったということで、今回私どものほうで案ということでお出ししたのも、トータルいたしますと、いろいろな学部があるところでございますので、その学部のあるのを資源のある分野で生かすのは十分可能だということで、そういう意味で先ほどの繰り返しになってしまいますが、多くの系列をつくることことができる。それで多くの系列とともに、当然普通科系等の系列も加えるような形になってくるかと思いますが、それを加えることによりまして、いろいろな選択肢の中で先ほども出てまいりましたように、必ずしも専門性を求める場合と、そうでない場合によりまして、系列間の選択というのは可能でございますから、それによって希望できる学科を選べるということは、イコール、自分の選んだ学科でございますので、意欲を持って学習することができるということを考えた場合に、非常に有効だと考えた次第でございます。これが私どもの考えでございますが、あとは委員さんのそれぞれのお考えであると思っております。

(池上委員長)

ありがとうございました。そういうお話でございますが、いかがでございましょうか。

(小口委員)

我が社にも、いろんな工業系の専門学校の高校を出た子どもも多く参りますが、考えてみると、現実的に彼らが勉強したことを仕事で使うというのはほとんどないですね。それで、これは大学でも同じことで、大学の工業系を出てきても、あまり実習している腕を磨いてきても、ほとんど会社でやっていることは違う。

先ほど言いましたように、むしろ大事なのは興味を持つというか、先ほど技術と技能と、それから結びつき。センスを磨くという話をしましたが、技術というのは、期待しているのは、やっぱり「モノをつくるということは面白い」ということを知ることなんですよ。それから技能で言うならば、僕はこれは二つあると思いますが、一つはモノをつくるというのは非常に簡単にはできないと。例えば今、私どもも諏訪の商工会議所でいろいろ研修をやりますが、その研修では一日中やすり掛けをしているんですね。それで、あるいは大会社の部長クラスも一日中やすり掛けをするんですね。これはやっぱりモノをつくるという本質を知ってほしいということ。それと併せて簡単にはできないと。それでこれをやり遂げることによって達成感を味わうと。こういうことだと思うんですね。

それで、もう一つは、やっぱり原理原則。この辺になると非常に幅が広いのですが、つぶしが利くんですね。ですから、違ったことに移っても原理原則がしっかりと分かっているれば転換が利くわけですから。そういう意味では非常にありがたいわけですね。それから、センスを磨くという意味では、先ほど委員長さんもおっしゃいましたが、やはりインターンシップあるいは企業が学校に出向くようなことによって、実際はどうなっているかということを主に知ることができるわけで、そういう意味では私は本当に専門的な学校がある必要があるか。むしろ総合学科でも、そのようなことは可能ではないかなと私は思いたいんですね。

要は彼らが好きになるということのほうが大変なように思うのです。それによって例えば一歩上がって、また好きな方向へ進んでいけばいいわけだと思うんですね。なかなか、

今の高校のレベルで広範囲なマイスター的な原理原則を勉強することは、とても期待されていないのではないかと私は思っているのですが。

（小林委員）

北原曜先生の職業をベースにした総合学科ということについてですが、私は結局、趣旨によって違ってくるかなと思うのです。十分私はつかんでいるわけではないんですけども、藤本先生もちょっと前におっしゃいましたが、全国的な中で、いわゆる大学進学により有利にさせるための総合学科も出てきているとありました。それが邪道なのかどうかは別として、そうなってくれば今の長野県の大学進学の状況は、現行は非常に良くないということ言えば、何でも職業学科と結びつけて総合学科を考えているのではなく、まさに普通科へ総合学科を持っていくという方法もあると思います。

それともう一つ、やはり先ほどから議論しているように、本当に目的意識を持って、進路の幅をもっと広げていくという意味では職業科とセットでつくるとか、どちらがいいというよりも、つくる目的によって変わってくるかなと思います。以上です。

（池上委員長）

ご意見、ほかにございますか。まだ、もうちょっと時間がございますので、今日ここで言っておきたいという方がございましたら、ぜひ。

（藤本委員）

「総合学科は職業高校に変わり得るのか、その2」という資料の上から6行目に、志学館高校で昨年、商業科の系列を選択した生徒で、25単位以上履修した人はゼロ、20単位以上した人が5名、他の生徒が10単位以下です。これは私が志学館高校の商業の先生から聞いた実績です。専門性について、全国の総合学科をインターネットで全部調べている過程で、ある総合学科は総合学科として一括して入学させるのではなくて、農業科とか、工業科に40名とか、ある程度縛りをかけているような総合学科もあったのですが、これは生徒に勝手に自由に科目を選ばせたら、専門性が何も深まらないためだと思います。やっぱり先生方がかなり、縛りと言ったらおかしいですが、「この授業を受けて、次はこの授業を受けて、この授業を受けたら、こういう進路が」、「こういう系列を取ると最終的な進路は、こうだ」という指導を先生方がしないといけないと思います。それをするか、しないか先生方の指導が専門性の確保に影響してくるのです。そうは言っても基本は単位制だということです。

それから、長野県の職業高校というのは、どちらかと言うと、他県に比べて普通教科の割合が非常に多いです。要するに、専門性よりも普通教育を重視しているのが長野県の職業高校です。他県では、専門科目は25単位以上、最悪の場合は20単位でもいいわけですので、普通教育はやっていない、専門的教育をうんとやっているところもあるのですが、長野県の場合は全般的に30から35単位と、かなり専門教育を抑えて、普通教育をやっている。

長野県の場合、非常にレベルが高く、前も言いましたが、国立大学、公立大学に入学する生徒数は全国でも5番に入るほど職業高校生は優秀です。

それと、もう一点だけ。職業高校の専門性は委員さんが言われるほど、そんなに専門性はなく、専門性よりも普通教育を重視している。さらに機械科や電気科でも、工業科目の中に共通履修科目というのがうんと増えてしまい、どの工業科の小学科の生徒でも情報基礎はみんな共通に習うし、工業基礎もみんな共通に学ぶ。だから専門性に割り当てられる科目は、たった 10 単位です。専門高校へ行くと、もう機械科では機械だけではなく普通科に近いというのが長野県の実情です。

（ 関 委員 ）

今、藤本委員さんのご発言をちょっと補足します。職業学校は今、専門高校と言っていますが、専門高校の中では教員の数でいくと、およそ半分は英語・数学・国語という普通科の教員ですので、専門高校だからと言って専門学科の教員が大変いるわけではありません。ですから、そういう意味で、先ほどの北原委員さんの、普通高校を総合学科にするか、あるいは専門高校を総合学科にするかというような、そういう意味では専門高校を総合学科にしたほうが専門科の先生と普通科の先生と、ほぼ半々ずついますので、非常にやりやすいということが言えると思います。

（ 池上委員長 ）

どうぞ、ご発言してください。よろしゅうございますか。

（ 北原曜委員 ）

ちょっと「ピン止め」というか、一応コンセンサスを決めていただきたいと思います。先ほどの多部制・単位制については、三通で設けたほうが良いと、設ける方向でやるという結論でしたよね。総合学科についても、この場で設ける方向が良いということで、「ピン止め」していただけると、私は、あとすごくいいのではないかと思います。

（ 池上委員長 ）

今日、必ずしも結論を出すものではないのですが、そのポイントはそのとおりですが、今日というところがポイントですが。次回ではということですか。今日ということですか。

（ 北原曜委員 ）

総合学科については以前から、そんなに反対の意見は強くなかったと思います。もう短期的にも、あと 2 カ月です。ですから、そろそろ決まったことを押えていかないと、次の議論が進まないのではないかと思います。

それで、学校の数とは別としても、あと配置についても別としても、総合学科を設ける方向で今後進めていくということを「ピン止め」していただけるといいかなと思います。

（ 池上委員長 ）

そういうご趣旨のご発言ですか。特にほかの意見をお持ちでございましたら、おっしゃっていただければと思いますが。よろしゅうございますか。

（岡庭委員）

その点で先ほど吉江さんが言った、総合学科多部制高校は75校減らした上で考えるというお話をしたので、まず75校ありきの上に、多部制・単位制高校と総合学科の高校があるんだというふうに、私は先ほどの話を理解したのですが、それはどうなんでしょうか。

（吉江高校教育課長）

75校と総合学科は別に考えていただいて結構です。あくまでも私どもが89校をまず、いわゆる適正な範囲として考えた場合に、75校というのを想定いたしまして、それから75校のうちの4校は転換して、多部制・単位制でどうかということの中で、79校という数字が出ているということでございまして、総合学科はあくまでも、いわゆる従来からプラスマイナスで総合学科というような位置づけにはしていません。たまたま、こちらのほうの地区にご提案しているのは、これはもちろん今日の議論は、この場所がいい、悪いの議論は別としてのご議論だと思っておりますが、私どももご提案するとすれば、あのようなご提案をさせていただいているということでご理解いただきたいと思います。

（池上委員長）

よろしゅうございますか。

（熊谷委員）

ちょっと待ってください。総合学科高校は75の実数ですよ。そうですね。ですから75の実数の中に、総合型高校があって、多部制・単位制が外であると、4校が。そういうことですよ。

（吉江高校教育課長）

はい。

（池上委員長）

先ほど北原委員ご提案の点でございしますが、この点はそういうことでよろしゅうございますか。

（藤本委員）

状況によっては、僕は下農というのだったら反対です。

（池上委員長）

それは分かります。

（岡庭委員）

75校ありきと、その上での総合学科という話では、もう決まったような話だから。その話は、なしですよ。この第三通学区の中に総合学科高校のような学校は必要だという点で認識したと。前の話としてはもう十分です。そういうことで。

(池上委員長)

はい。それでは、そういう結論でいきたいと思います。時間がまいりましたが、ちょっと、先ほど北原曜委員からの今後の問題、時間割の問題が、ご提案と心配がございましたので、お願いをしておきたいと思います。

当然のことですが、先ほどの多部制・単位制の議論がさらに深まらなければいけないという認識を持っておりますので、これはいろいろ準備をしながら、その議論をしていただくと、こういうことに相成るかと思います。

総合学科問題も、当然、今日の議論だけでは終わらないというところで、ございます。それから、職業校に、例えば我々から申し上げる意見等も出てまいりますので、その問題について。それから地域高の問題がまだ後ろに残っておりますし、そんな点のご議論を次回にはしていただくということにさせていただいて、盛りだくさんでございますが、次回からは今度はどこの地域に、どういう学校という、いよいよ本題に入りたいというふうに思っておりますので、よろしくお願いいたしますと思います。

なお、先ほどの、ちょっと私は聞き落としてしまいましたが、静岡中央高の視察を、計画を、そのところは…。

(野村主幹教育支援主事)

よろしいですか。静岡中央高校というふうに限っているわけではございません。まだ具体的なものは、出ておりませんが、推進委員の皆様には第一から第四までですけれども、含めて推進委員の皆様には本県には多部制等ございませんので、他県の一部制等の視察を考えていると。日を設定しますので、またご参加くださいという意味でございます。改めて、また計画ができましたらご案内を申し上げますと、そういうことでございます。

(池上委員長)

先ほどの定時制の問題と絡んで、三通に望ましい類似校があったらという、ご希望があると思いますので、そんな点をひとつよろしくお願いいたします。それでは、今日の議論を終了させていただいて…。

(藤本委員)

部会の問題は、だいぶ議論してきましたが、まとまらなかったものですから。この委員会を30分なり1時間延長して、この席でいろいろな方、関係者ご意見を聞くというのは、いかがでしょうか。傍聴の方の発言も。というのは、昨日行われた第一通学区では、それが決まったみたいですので。ホームページ上で実施を公開するなど、方法は私はよく分かりませんが、各地区にかなり研究されたり、いろいろな対案を持った方がおりますので、委員会が終わった後、この場で、30分なり延長して、そういうご意見を皆さんから伺っては。部会はどうも、時期的にもだんだん困難になってしまったのでいかがでしょうか、第一推進委員会で決まったようなものは無理でしょうか。

(池上委員長)

いわゆる私の意見になりますけど、何かご意見ございますか。

第一推進委員会の様子を話していただくとか…。

(藤本委員)

もっと、具体的な話を。

(吉江高校教育課長)

第一推進委員会におきましては、次回というお話ではございませんでしたが、まあ近いうち、おそらく、そうは言いましても、直近のなるべく可能な時期ということだと思えますが。ご意見がある地域。具体的には、反対初めにありきというのではなくて、むしろ、「こういう理由で、こういうような案がどうか」とかというようなものを含めて具体的なご提案等をいただけるようなことを、ご発言いただくようなイメージで、それぞれの地域からのご意見を聞いたらどうかと。それで、もちろん、ご意見がある地域、ない地域、いろいろあると思うので、その辺については、またホームページなりで明らかにした上で、決定していこうというようなお話に、まとまった次第でございます。そんなところです。

(池上委員長)

それでは、また検討させていただいて。先日も伺っております。

(岡庭委員)

旧第9通学区は、南信州教育連合の連合長の諮問委員会で、各界の皆さんの高校改革に対する懇談会というのが13日目からスタートします。それらの議論につきましては、また三人の委員を介しまして、委員会で反映していきたいと思えます。

(池上委員長)

ありがとうございました。よろしゅうございますか。それでは次回の日程をよろしくお願いしたいと思います。

(野村主幹教育支援主事)

お願いいたします。

次回の日程につきましては、10月の24日月曜日になりますが、午後をおよその目安ということで考えております。また委員長さんともご相談の上、改めて場所とか確定しましたらご案内申し上げたいと思えますので、よろしくお願いいたします。

もう一点よろしいでしょうか。委員長さんのご希望で、本日、実は高遠高校に行かれたいというお話で、高遠高校に行ってもいいかということをお願いしてございますので。ただ、事務局のほうではちょっと、ご同行はできませんが、もしご希望の推進委員さんがいらっしゃいましたら、後で委員長さんのほうに、ぜひすぐに言っていただきたいと思います。高遠高校にご連絡することが必要になりますので、よろしくお願いいたします。

(池上委員長)

ありがとうございました。午後2時に訪問するとしてございますので、ご希望がございましたら、お申し出いただければお願いいたします。

では、時間がまいりましたので、本日の委員会を終了したいと思います。ありがとうございました。